

---

# 笛の魔力

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笛の魔力

### 【Nコード】

N1704L

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

少年はモーツアルトのオペラを観てから笛をはじめた。そして成長してあるオーケストラに誘われたが彼が選んだ行く先は。魔笛からヒントを得た作品です。

## 第一章

### 笛の魔力

そのオペラをはじめて見たのはたまたまだった。本当にたまたまテレビでやっているのをちらりと見た。だがそれがはじまりであった。

「ねえお母さん」

彼はすぐに一緒に部屋にいた母に尋ねた。

「この笛を吹いてる人は誰なの？」

「このテレビの人？」

「うん、その人誰なの？」

「タミーノっていうのよ」

母はこう彼に尋ねた。

「タミーノ王子っていうの。このオペラの主人公よ」

「タミーノ？オペラ？」

「そう、今笛を吹いている人はタミーノっていつてね」

さらに問うた彼に対してさらに話すのだった。

「それで今やってるのはオペラっていうお芝居なのよ」

「歌を歌いながらお芝居をするの」

「そうよ、そうするのよ」

息子に対して話す。その間ずっと画面を見ている。実は彼女もそのオペラを観ているのである。観ながら我が子に話しているのである。

「歌いながらお芝居をね」

「何か凄いね」

「そうでしょ、面白いのよ」

母はオペラが好きだった。それを窺わせる言葉だった。

「それでこのオペラの名前はね」

「何ていうの？」

「魔笛っていうのよ」

そのタイトルも教えた。ただ息子にわかりやすいように名前と表現したのだった。

「これがこのオペラの名前なのよ」

「魔笛っていうんだ」

「そう、モーツァルトって人が作ったのよ」

「モーツァルトって人が」

「とてもいいでしょ」

また言う母だった。

「このお芝居も歌も」

「何かとても不思議だね」

芝居の内容や歌、それに音楽を聴いてみての言葉である。実際にそう思った彼である。

「何でこんなに不思議なんだろう」

「そうね。とても不思議よね」

そのことについては母は答えなかった。答えられなかったと言うべきか。何故この魔笛という作品がここまで不思議な雰囲気を感じ出しているかは彼女も口に出して言えなかったのである。感覚としては何となくわかっていても言葉として出すのは難しかったのだ。

「これって」

「不思議だけれどいい音楽」

また言う彼だった。

「ずっと聴いていたい」

「そう思うのね」

「うん」

また答える男の子だった。

「ずっと。いいかな」

「いいわよ」

母は微笑んで我が子のその言葉を受けた。

「若しずっと聴きたいのならね」

「どうすればいいの？」

「笛が上手くなればいいわ」

そうするといいというのである。

「聴きたいのならね」

「笛をなんだ」

「そう、笛をね」

また言われた。

「わかったわね」

「うん、それじゃあ」

これがはじまりだった。この少年、フリッツはそのまま母の言葉に誘われて笛をはじめたのであった。しかしこれが思わぬことになった。いつた。

笛が上手かったのである。それも最初からだ。それを聴いた母も学校の友人達も思わず目を瞠った。我が耳を疑う程であった。

「えっ、嘘」

「こんなに上手いって」

「笛が」

皆それを聴いて驚くばかりであった。ただ上手でいい音色を出すだけではなかった。その笛の音は流麗でありそしてどんな曲も奏でることができたのである。

そしてそれは学校の先生も聴いた。その先生の感想は。

「君はそのままにしておくのが惜しいかも知れないね」

こう言ったのである。

## 第二章

「もっと笛を勉強するんだ」

「この笛をですか」

「いや、フルートだ」

「それだというのである。」

「もっとフルートを勉強するといい」

「フルートを」

「そうすれば君はもっとよくなる」

「こう彼に話すのだった。ピアノの前で。」

「フルートをやれば君は必ず素晴らしい奏者になる」

「わかりました」

「それを聞いて頷く彼だった。」

「それじゃあそのフルートを」

「頑張るんだよ」

「ここで先生は微笑んで彼に告げた。」

「それが君の為になる。いや」

「いや？」

「その音色が他の人の為にもなる」

「こつも言つのであつた。」

「それがね」

「他の人の為にもですか」

「そう、なるんだ」

「先生は彼に話した。」

「だからだ。いいね」

「はい、フルートをやります」

「こうして彼はフルートをはじめることになった。そうしてフルートを吹くとであつた。家で練習しているとまずあの母親が言つのであつた。」

「フルート、上手いわね」

「そう?」

「上手いわ。あなたもそう思っわよね」

「うん」

父もそうだという。母のその言葉にだ。

「とてもね。いいよ」

「そうよね。吹けば吹く程よくなってるし」

「そうかな」

そう言われても自分では今一つ実感の沸かない彼だった。自分ではそうなのである。

「自分ではそれは」

「他の人が聴けばわかるのよ」

ところが母はこう言うのである。

「それはね」

「フリッツのフルートははじめて聴いたけれど」

父はそうだった。しかしそれでも言うのであった。

「いいな、確かに」

「そうよね。これは真面目に練習すればヨ本当に凄いことになるわよ」

「そうだね、なあフリッツ」

父は妻の言葉を受けながら我が子に対して告げるのだった。

「いいかい?」

「うん」

「御前は笛をどんどんやるんだ」

そうしろというのである。

「いいな、どんどんだ」

「先生と同じこと言うんだ」

「そうなのか。まあそうだろうな」

我が子の言葉を受けてこう返した。

「誰だってそう言うさ。御前の笛の音を聴いたらな」

「うん、だつたら」

「もつと笛を吹くんだ、いいね」

「わかつたよ、お父さん」

父にも言われた。そして母にもである。すると彼の笛の音はさらによくなつてである。彼はその笛の練習をさらに続けた。やがて彼の笛は人だけが聴くのに留まらなかつた。

学校の校庭で吹いているとであつた。

まずは彼の笛を聴きに皆が集まっていた。それで聴いていたがそこにであつた。他やがて猫が来たのであつた。見れば一匹だけではなかつた。

「猫!？」

「猫が来て」

「それに」

猫はフリッツの周りに集まつた。緑の芝生の上に座つて吹いている彼の周りにだ。そして側にある木の上にだ。別の生き物達が来たのである。



### 第三章

「小鳥まで来たし」

「嘘みたい」

「けれどこれって」

「そうよね」

ここで皆あることを思い出した。それは。

「魔笛よね」

「ええ、それよね」

「本当にね」

モーツァルトのそのオペラを彼等も話に出したのである。そのオペラをである。

「動物達も集まって」

「それでこうして静かに聴くなんて」

「凄いよね」

皆驚きを隠せなかった。しかしそれ以上にである。彼等はさらに言うのであった。

「聴いていたらそれだけで静かになって」

「そうよね、穏やかになって」

「心が安らいで」

「落ち着くよね」

彼の笛を聴いているとそうなるのだった。落ち着くのである。心は昂ぶらずに落ち着く。彼等はそれを感じて静かな気持ちになっていくのであった。

それは猫達や小鳥達もであった。彼等もまた同じだった。

彼の笛は聴いていると誰もが落ち着き平和になれた。それを聴いた母も言うのだった。

「貴方の笛はね」

「うん」

「人を平和にさせる笛よ」

まさにそれだというのである。

「その心をね」

「僕の笛が」

「もつと吹くのよ」

そしてこうも言うのであった。

「いいわね、もつとね」

「うん、それじゃあ」

「これは考えなかったわ」

母は少し驚いた顔で述べた。

「まさか。貴方の笛こそがね」

「僕の笛がどうしたの？」

「魔笛だったのよ」

まさにそれだというのである。

「それだったのよ」

「あのオペラの笛だったの」

「魔笛はね、聴いた相手の心を楽しいものにさせるわね」

「うん」

それがオペラに出て来る魔笛である。この笛の魔力にはモーツァルトがフリーメイソンの思想を入れたという説もある。どちらにしろかなりの魔力がある笛なのは確かだ。

「貴方の笛はそれと同じなのよ」

「あの魔笛と同じで」

「きつとその笛は」

「何か人の役に立てるの」

「ええ、間違いないわ」

確かな声で我が子に告げた。

「だから頑張つてね、笛を」

「うん、わかったよ」

母にも言われてであった。彼は笛を学び吹き続けた。そうして幼

い日も子供の日も続けてそのうえで時間を過ごした。やがて音楽大学に進んだ。そしてそこでも。

「あれがフリッツ・スターマンか」

「ああ、そうだな」

「噂以上だな」

皆その笛の声を聴いて唸るのだった。これは彼の笛を聴いたことのある他の者も同じであった。誰もがそう思ったがそれは彼等も同じだったのだ。

「あの笛の音があれば何でもできるな」

「そうだな、本当に」

「音楽史に名前が残るな」

こうまで言われるのであった。音楽大学に入ったその時点です。彼はそれだけの技量をもう身に着けていてそれ以上のものも備えていたのである。

誰もがその将来を渴望していた。そして。

## 第四章

彼を直接見ている教授が言っているのであった。

「君の進路が決まったぞ」

「進路がですか」

「ウィーンだ」

音楽の都である。今更言うまでもなく。

「ウィーンフィルハーモニーから話が来た」

「そこからですか」

「そうだ、大学を卒業したらすぐに迎えたい」

こう言うのである。

「そう言っ てきている」

「そうなのですか」

文句なしに世界最高のオーケストラの一つである。ウィーンかベルリンか、長い間そう言われてきている。まさに音楽の都に相応しいオーケストラである。

そこに大学を卒業してすぐに声をかけられたのである。これは途方もないことだ。

だがフリッツは。静かにこう言うのであった。

「私はです」

「受けるな、勿論」

「まずは神父になります」

何とここでこんなことを言うのだった。

「神父になりたいと思っています」

「神父にだと」

「そしてそのうえで世界を回ります」

そうするといつののである。

「そうしたいと思っています」

「何っ!？」

教授はそれを聞いてだ。思わず声をあげた。まずは自分が聞いた言葉が信じられなかった。何しろあのウィーンからの誘いだからである。

だからこそ。すぐに問い返した。

「私は聞き間違えたのか？」

「いえ、間違いではありません」

彼ははっきりと答えた。

「私が神父にです」

「なるというのか」

「いけませんか」

「神父になることはいい」

それ自体はいいというのである。

「しかしだ」

「しかしですか」

「そうだ。ウィーンだぞ」

彼にこのことを強調する。ウィーンからの誘いだということをだ。

「ウィーンから誘いを受けているというのにだ。いいのか」

「私は考えていました」

ここで彼は静かに言うのだった。

「笛を何の為に使うべきかを」

「笛をか」

「そうです、笛をです」

言わずと知れたフルートである。彼の笛は今はフルートである。

そのフルートの音色はまさに右に並ぶ者がいないと言われるまでになっていたのだ。

その笛をである。何の為に使うべきかと今言うのだった。

「笛を何の為に使うべきか」

「ではその答えはか」

「まずは神父になります」

また言うのだった。

「神父になつてそして」

「そして？」

「世界を回ります」

そうするというのである。

「そうしてです。世界を回って私の笛を聴いてもらいます」

「君の笛を」

「そうします」

彼は言った。

「それこそが私のすべきことです」

「ではウィーンからの誘いは」

「お断りさせて頂きます」

そうするというのである。

「そうさせてもらいます」

「そうか。決意は固いのだな」

「ウィーンからのお誘いは確かに有り難いことです」

それは否定しなかった。彼にしてもウィーンフィルハーモニーからの誘いがどれだけ光栄なことかはわかっていた。しかしそれでも  
なのだ。

## 第五章

「ですが私のすべきことは」

「わかった」

ここまで聞いてだ。遂に彼も頷くのだった。

「それではだ。君の望むようにするといい」

「有り難うございます」

「わかった」

こう言つてであつた。彼は神父になりそのうえで世界を回つた。

まずはソマリアに向かった。内戦がまだ続いているその国にである。神父として向かいだ。難民となりあてもなく集まっているだけの人々の前に来てだ。その笛を吹くのだつた。

その笛の声を聴くとだ。まずは子供達が顔をあげた。

そして彼の前に集まり。笛の音を聴くのだつた。

「ねえ、この笛つて」

「そうだよね」

「聴いているとそれだけで」

「楽しくなってくるよ」

こう言いながら少しずつ笑顔になっていくのだつた。

「ねえ、皆来てよ」

「この人の笛凄いよ」

「物凄いよ」

彼等は口々に同じ子供達を呼ぶ。やがて難民の中の子供達が全て集まつてである、彼のその笛の音を聴いて楽しい顔になつていった。暫くは笛の声を聴いているだけだった。しかしであつた。

やがてそれでは飽き足らず。彼等はそれぞれ身体を動かし。踊りはじめた。

「楽しいね」

「そうだよね」

「とてもね」

こう言いながら踊っていく。皆楽しく踊りはじめた。  
やがて子供達だけでなく大人達もやって来てである。やはり踊りはじめた。

難民達が楽しく踊りはじめた。それは今までになかったことだ。

フリッツと共に来た神父達はそれを見て。思わず言った。

「これは一体」

「スターマン神父の笛の声を聴いて」

「それで難民の人達が皆踊りはじめるなんて」

「まさにこれは」

「そうです、あれです」

彼等は口々に言っていき。そして。

あの笛のことを話に出すのであった。

「魔笛だ」

「それだ」

「それに他なりません」

モーツアルトのその笛だというのである。あのオペラのだ。

「あの笛そのままです」

「これはまさに」

「ええ、あの魔笛がここに」

あると。今わかったのである。

そして次に難民達を見る。その楽しく踊っている姿をだ。

踊っているのは人間達だけではなかった。空を飛ぶ鳥達も彼の上を舞い瘦せた犬達も来て踊っている。まさに魔笛そのものであった。

「今までこんな笑顔はここには」

「ええ、ありませんでした」

「ましてや踊るということなぞ」

「全く」

そうしたことなかったのである。沈みきったそのままだったのである。



だが今は違っていた。誰もが明るい笑顔で踊っている。まるで別世界にいるように・

「スターマン神父の笛で」

「本当に何もかもが変わりました」

そうなのだった。彼は全てを変えたのである。

その日から難民達の顔に希望が戻った。これまで何もする気力もなくなり絶望に沈んでいた彼等の目にだ。それが確かに戻ったのである。

## 第六章

彼はソマリアにいる間ずっと笛を吹き続けた。そうして人々に希望をまた見せたのである。

それからもだった。各国を回り笛を吹き続けた。それにより絶望に打ちひしがれている人々に希望をまた見せていった。

それを続けているうちにだ。やがてマスコミが彼に注目して。取材をしてきた。

マスコミの者達は底意地の悪い笑みを浮かべて。こう彼に問うのであった。

「一体どんな魔法を使っただんですか？」

「あんなことができるなんて」

「貴方は預言者が何かですか？」

彼が人々に希望を与えていることに嫉妬していたのだ。こうした嫉妬により他者を貶めるのは人として醜い行為だがマスコミのよくやることでもある。

彼等のその下劣な問いに対して。彼はこう静かに答えた。

「私は私です」

まずはこう答えたのである。

「それ以外の何者でもありません」

「おやおや、それはまた」

「御謙遜を」

「いえ、謙遜ではありません」

彼は返した。あくまで彼として。

「私が笛を吹くことを許されたのは」

「何だというのですか？」

「それでは」

「神の御意志です」

キリスト教徒、それも神父として相応しい返答だった。

「神が笛の声で人々、そして動物達の心を癒し楽しませて下さる為です」

「では貴方が笛を吹かれるのは」

「神の御意志なのですね」

「そうです」

まさにそれだというのである。

「それ以外の何者でもありません」

「ふむ。そうなのですか」

「神ですか」

彼等実はクリスチャンであつた。クリスチャンとして神の名を聞くとそれで心が動かない筈がなかった。彼等もまた信仰を持っているからである。

「神が貴方に笛を吹かせていると」

「貴方の才能ではなく」

「はい、そうです」

まさにその通りだと。フリッツは答えた。

「そして神のこの人々を癒し平和をもたらすという願いの為に」

「笛を吹かれるのですね」

「これからも」

「そうさせてもらいます。私はそれだけです」

静かに微笑んでの言葉であつた。これこそが彼が笛を吹く理由であつた。マスコミの記者達も彼の言葉を聞き深く感じ入つた。当初の意志は消えて。

「わかりました」

「では、私達はです」

「私達は？」

「貴方のその笛の声、つまり神の御意志をです」

「祝福させてもらいます」

こう答えたのである。

「確かに」

「そうさせて下さい」

「わかりました」

そして彼も記者達のその言葉を受けた。そうしていつも自分の側に置いてあるそのフルートを手に取って。静かに吹きはじめたのであった。

フルートの優しい音色が記者達を包んでいく。それは確かに神の言葉であった。人々を癒し、平和に導く神の優しい心そのものであった。

彼はその生涯を笛に捧げた。戦乱や災害、困窮に喘ぐ人達や動物達の前に出てそうして笛を吹き彼等の心を楽しませた。それこそが神の声だと言つて。そうし続けたのである。フリッツ・スターマンの輝かしい生涯はその笛と共にあったのである。それは紛れもない事実であった。

笛の魔力

完

2009・12・29

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1704/>

---

笛の魔力

2010年10月8日15時12分発行